

平成 26 年 11 月 26 日 一橋講堂で開催された「女性研究者研究活動支援事業 シンポジウム 2014」に参加してきました。

午前中には非公開で分科会行われ、あらかじめ希望を出して出席することになっていました。分科会は 6 テーマあり、A) 両立支援、B) 意識改革、C) ポジティブ・アクション、D) 研究力向上・リーダーシップ育成、E) 次世代育成、F) 連携・ネットワーク構築。三重大学としては今後「連携・ネットワーク構築」が重要と考えて、その分科会を希望したのですが、希望者多数で「意識改革」に回ることになりました。

意識改革の分科会では、文部科学省生涯学習政策男女共同学習課主催の「学生のための男女共同参画ワールド・カフェ 100 人男子会 X 女子会！」で三重大学が取り組んだことに大変注目していただき、分科会参加者にご紹介させていただきました。また総会でも座長からのご指名で、10 分程度ですがワールド・カフェの様子をスライドショーにしてご紹介しました。

分科会ではワールド・カフェの冊子を参加者全員に配布して説明をしましたが、多くの参加者が興味を持たれ、ぜひ行ってみたいという希望がたくさん聞かれました。意識を変えるという手法として、今後広く活用されるだろうと思われました。もちろんこの手法は、男女共同学習課の開発ではなく既存のものです。学生のみならず研究者の予備軍となる男女を対象に行っても有効であろうと考えられました。

分科会では、誰の意識改革が問題なのかということで、まずは男性研究者の意識改革で、初期のころによく作られた女性研究者の紹介パンフに代わって、イクメン男性研究者のパンフレットが紹介されました。上智大学からは、仕事と子育ての意識改革として、男性研究者のみならず多くの男性職員の奮闘ぶりも紹介した冊子を作成しており分科会で配布されました。スーパー・グローバルに採択された上智大は、リケジョ支援もグローバル企業と進めて、女性研究者支援とグローバル・プログラムをリンクして実践中とのこと。

そのあと男性よりも女性自身の意識が問題であるとする意見もたくさん出ました。そのために、意見交換の場としてランチョン・ミーティングが有効という意見も複数の機関から出されました。忙しい女性研究者にとって、結局最後の取りうる時間帯は昼食時ということのようです。また全体の働き方を変えない限り女性医師の離職率は、改善しないということも医学系の参加者から出ました。意識改革程度では、本質的改善を図ることはできないということなのです。これは医師、看護師に限らず研究者についても、ワークが、ライフのバランスの中に位置づけられない限り、継続が困難ということのようです。働き方という大枠に関連して言えば、育休をとると保育園に入れる優先順位が下がるのは問題であるという意見も聞かれました。

意識ということでは、やはり大都会の大学と、地方大学にはかなり温度差もあり、室蘭工業大学の草の根的な地道な活動の継続が印象的でした。また意識改革でポスドクの人に自分の経験などを院生に話してもらうのも効果的ですし、ポスドクにとっても、そうした取り組みは、教育歴にカウントできるとのことです。

結論として、男女共同参画だけでは足りず、意識改革の呼びかけをし続けないと、波紋は消えてしまうことを肝に銘じておく必要があることが確認されました。女性の当事者意識も、つねに意識に上らせるよう普段の努力が必要なようです。

連携については、総会で同窓会組織を活用した連携事業が紹介されました。保育サービスについても連携で、産学官連携を通じたパートナー選びが紹介されました。

その他に、総会では日本 IBM 会長の講演と鹿児島大学学長の講演が行われました。

18 時ころから意見交換会が行われました。近隣では、名工大が今年採択され 11 月からプログラムが始まりましたので、東海での活動も今後期待したところです。